



富山の細工かまぼこをつくって40年余…中陳和悦氏



自信作の水産庁長官賞を受賞した「紅梅」

丁寧な作業をしたい。その日の調子によつて、手間を省くといふんです。手間を省くために3本書く線を2本にしたり、1本しか書かなかつたりする。人で、経営センスがない人さんにはわからなからといつて、等級を下げるのではなく我慢して上級ものを使う。原材料にお金は惜しみません。根っからの職人で、経営センスがない人も、こだわないと自分が納得できないところにも、気がつかないところには、いかもしれないが、自分自身が納得できないところには、わからなかつたりする。

ひと口メモ 生地蒲鉾

生地蒲鉾の創業は昭和2年。昭和18年に一時企業合併を経て、昭和40年代に法人化。新平社長は4代目である。中陳和悦氏は、三代目。現社長の新平社長は、4代目以上づく老舗企業である。中陳和悦氏は、大学卒業後、家業を継ぐことに。滑川蒲鉾の名人として呼ばれた本吉重和の下で、1年間、細工かまぼこを修行し

う。最初、少しつまんない。人が気づかないところにも、こだわった。その後、結婚式場が仕切るようになつた。

カジアリア高殿に鈴木博良が登場

テレビ東京で放送されている人気ビジネス情報番組「カンブリア宮殿」。番組「カジアリア高殿」の初め頃は魚屋。その後、結婚式場が仕切るようになつた。

小田原といえども、「小田原」という評判を打ち立てた、創業150年の「鈴廣」。その商品はすり身魚ランギングで第一に輝き、本店には年間100万人がおとずれる。小田和とという土地と、蒲鉾がおとずれる。小田和とがおり続ける鈴廣、その強さの秘密に迫る。

北陸新幹線の黒部宇奈月温泉駅から車で約20分。海辺近くに生地蒲鉾はある。

現在は、娘婿の新平氏に社長の座を譲り、経営からは一步退いて細工かまぼこの最盛

うすぐ70歳を迎えると、う風貌には、職人わつたようだ。富山の細工かまぼこの趨勢

は、時代の流れもあるが、品質の低下と製品づくりに込める職人の情熱の低下が影響しているのではないかと指摘する。納入価格の買い叩きにより、一部の業者の中には、原材料の品質を落とさざるを得なかつたところが出てきた。引き出物は、ハレの目出度いものだけに、日常品より、美

んで30年近く、造り続けてきました。同社の「昆布巻き」「赤巻」などを試食させてもらひながら中陳

さんと交わす会話は楽しい。「これは、ハモを加えている。こつちは、エンを入れているんで柔らかいは違うでしょ。最初、少しつま

行っていた頃、品評会は年に一度、集い、親しく親睦を図ることともに、かまぼこ製造業者の存在意義を確認する儀式であり、お祭りでもあった。若き中陳和悦氏の姿を、度々拝見していたのは、その頃である。近年、品評会は東京開催が恒例となり、お会いする機会はなくなつたが、毎年、品評会に出品される中陳氏の細工かまぼこを拝見しながら喜んでいた。今回、10数年ぶりに、再会できる機会を得た。中陳氏は、富山のかまぼこづくりについて話を聞いた。

## 職人の情熱と思いを込めて

かまぼこ業界に入つて約40年余り：

全國蒲鉾品評会が、まだ各地の持ち回りで行われていた頃、品評会は年に一度、集い、親しく親睦を図ることともに、かまぼこ製造業者の存在意義を確認する儀式であり、お祭りでもあった。若き中陳和悦氏の姿を、度々拝見していたのは、その頃である。近年、品評会は東京開催が恒例となり、お会いする機会はなくなつたが、毎年、品評会に出品される中陳氏の細工かまぼこを拝見しながら喜んでいた。今回、10数年ぶりに、再会できる機会を得た。中陳氏は、富山のかまぼこづくりについて話を聞いた。

一番のお気に入りなんですよ。けつこう、良い出来だと自画自賛しています」と、笑顔を見せ。作り上げるまでは、できないといふ。

細工かまぼこの減少の原因は、中陳氏は、細工かまぼこが減少した原因

は、味しなくてはならない。期だつた。結婚式の引出物が最大の需要だ。が、昭和55年頃から、下降線を辿り始め、平成初めの団塊世代の第二次ベビーブーム期に一時盛り返し、最盛期の7、8割くらいまで、水産庁長官賞を受賞した「紅梅」が飾られている。スケッチもご自身の手によるものだ。「最近の作品では、回復したもの。それでも3分の1に比較すると、現在は金額ベースで5分の1、数量でも3分の1程度に縮小した。

さらに、作り手の製品に込める情熱が希薄になつたのではないかといふ。修行時代、師匠だった故本吉重和氏（滑川蒲鉾）から常々言っていたのは、箱を開けたら必ず感激する製品じゃないと駄目。食べて美味しい、見て楽しい、そして、人が感動する商品をつくれと徹底的に教え込まれたという。「寿」という字を書くにしても、思いを込めて書かないといふ。作付いたら、いい氣付いたら、いつの間にか1本食べてしまつていたというの

で、私が付いたり、それで良いと思ふんでしまつていていたといふ。私はそれを頭に叩きこみますよ。私はそう思う」。



あつという間に「鰯」を仕上げる

## がまぼこ職人

### 名への横顔

生地蒲鉾 有限公司

取締役会長 中陳和悦氏

の出品を続いているこ

とからも、未だ、かまぼこへの情熱冷めやらずというところなのだろ。

味しなくてはならない。

期だつた。結婚式の引出物が最大の需要だ。が、昭和55年頃から、下降線を辿り始め、平成初めの団塊世代の第二次ベビーブーム期に一時盛り返し、最盛期の7、8割くらいまで、水産庁長官賞を受賞した「紅梅」が飾られている。スケッチもご自身の手によるものだ。「最近の作品では、回復したもの。それでも3分の1に比較すると、現在は金額ベースで5分の1、数量でも3分の1程度に縮小した。

さらに、作り手の製品に込める情熱が希薄になつたのではないかといふ。修行時代、師匠だった故本吉重和氏（滑川蒲鉾）から常々言っていたのは、箱を開けたら必ず感激する製品じゃないと駄目。

食べて美味しい、見て楽しい、そして、人が感動する商品をつくれと徹底的に教え込まれたという。「寿」という字を書くにしても、思いを込めて書かないといふ。作付いたら、いい氣付いたら、いつの間にか1本食べてしまつていたといふ。私はそれを頭に叩きこみますよ。私はそう思う」。



あるさと伝統味 山口県宇部市大字川上697-20  
TEL:0836-33-5151  
FAX:0836-22-3271  
<http://www.ubekama.co.jp/>



宇部がま  
宇部蒲鉾株式会社

山口県宇部市大字川上697-20  
TEL:0836-33-5151  
FAX:0836-22-3271  
<http://www.ubekama.co.jp/>